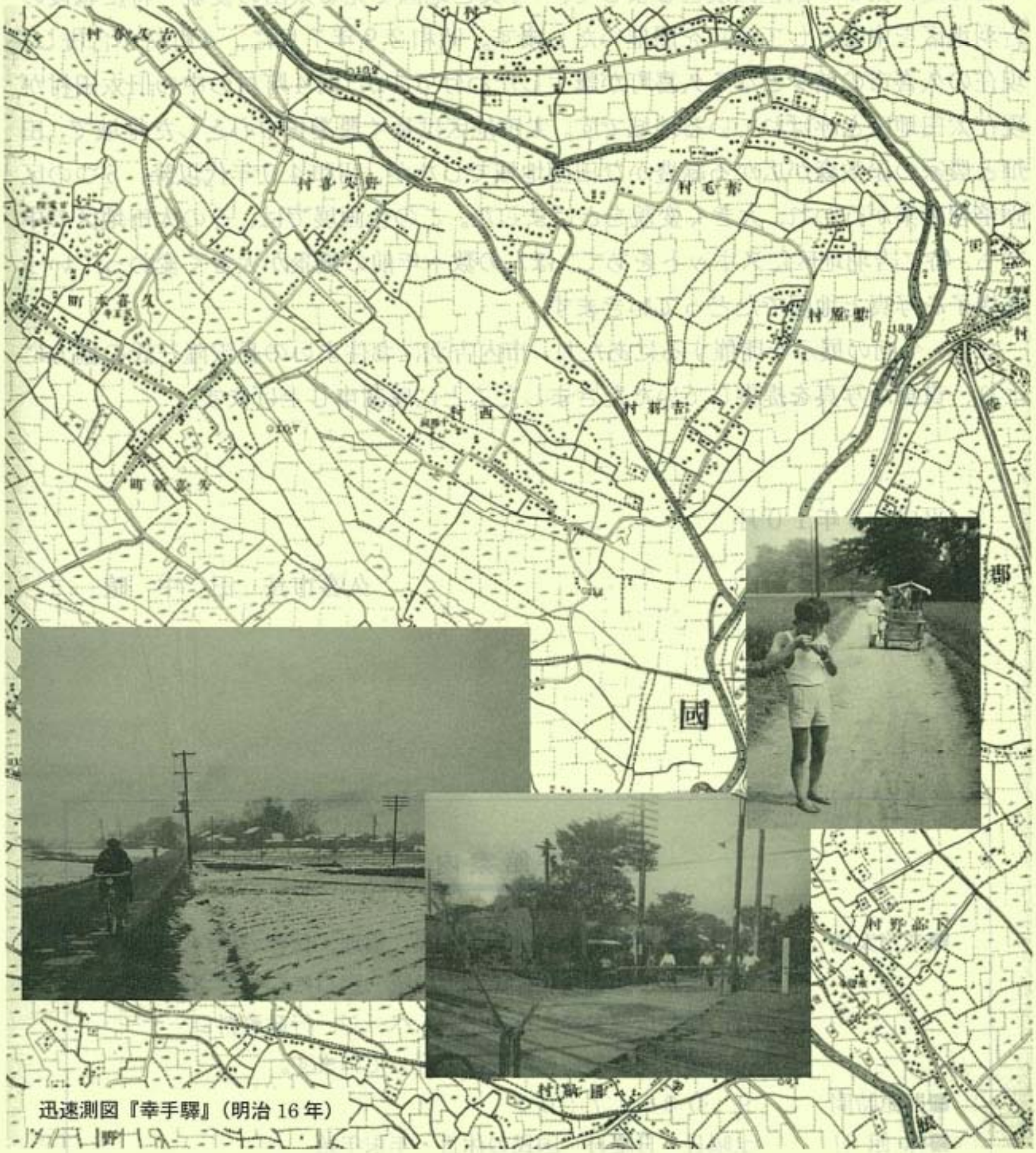
いいひと いいまち いきいき久喜市

第20回企画展

写真と地図で見る太田の変貌

—特に戦後の吉羽地区を中心として—



迅速測図『幸手驛』（明治16年）

平成18年10月10日（火）～12月10日（日）

久喜市公文書館

開催にあたって

久喜市公文書館は、「歴史資料として重要な市の公文書その他の記録」の保存と活用を目的に開館しました。公文書館では、多くの市民の皆様に利用していただくため、展示事業を開催しております。

この度、第２０回企画展としまして、「写真と地図で見る太田の変貌―特に戦後の吉羽地区を中心として―」を開催いたします。昭和２９年７月に、４町村が合併し、現在の久喜市の前身となる久喜町が誕生したわけですが、旧４町村の中の旧太田村が現在太田地区と呼ばれている地域です。太田地区は長く農業を中心とした地域で、田畑と農家の屋敷森が広がる緑豊かな田園地域でしたが、昭和４０年代以降、５つの区画整理事業が行われ、大きく変貌をとげました。この企画展では、その太田地区の中でも、特に吉羽地区にスポットをあて、ほんの数十年前の風景が大きく変わっていった様子を写真と地図でたどっていきます。

なお、今回の展示を開催するにあたり、市内吉羽にお住まいの長沢隆三氏の協力により、貴重な写真を提供していただきましたことに感謝申し上げます。

平成１８年１０月

久喜市長　田　中　暄　二

公文書館案内

■業務案内　　公文書館では、公文書等の収集、整理、保存のほか、情報公開制度及び個人情報保護制度の統一窓口になっております。また、広報広聴業務、市のホームページ、行政資料コーナー等、市政に関する情報の提供も行っています。

■開館時間　　９：００～１７：００

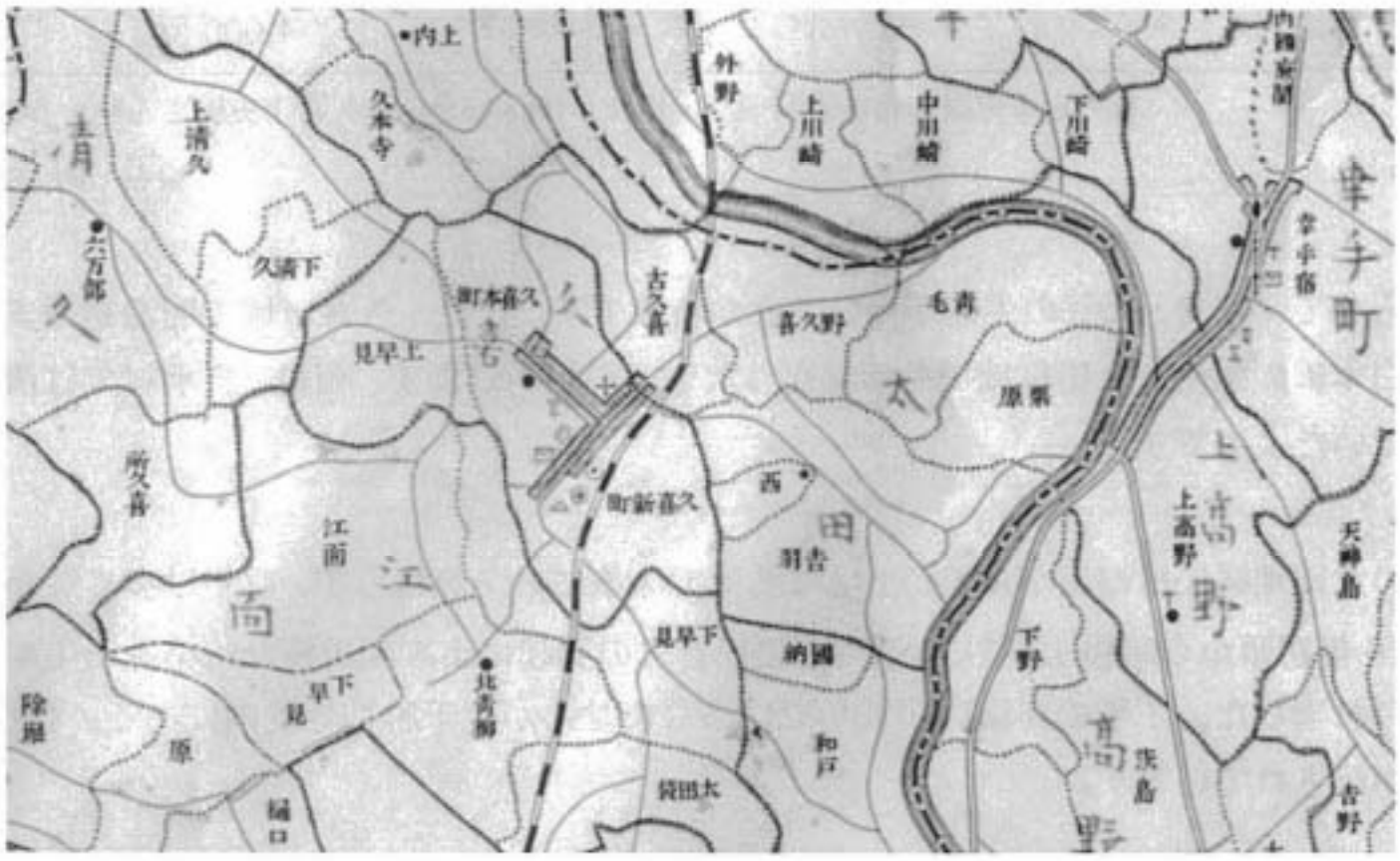
■休 館 日　　土曜日・日曜日・国民の休日・年末年始
（企画展の開催期間中は、日曜日も観覧できます）

■太田地区とは

西村、吉羽村、栗原村、青毛村、野久喜村、古久喜村の６か村が明治 22 年に合併して成立したのが太田村です。この地方が昔、太田庄と称していたことから、新村名は「太田村」とされました。（『埼玉県市町村合併史 下巻』昭和 37 年　埼玉県地方課 p1035）

この太田村の区域を太田地区といい、平成 18 年現在の町名では、下記の区域に該当します。

（吉羽１～５丁目、大字吉羽、大字西、栗原１～４丁目、大字栗原、青毛１～４丁目、大字青毛、青葉１～５丁目、大字野久喜、大字古久喜、東２丁目、東３丁目（一部を除く）、中央１・４丁目の各一部、本町８丁目の一部、北１丁目、北２丁目の一部）



『埼玉県市町村合併史　附録』より転載

■高度経済成長期以前の太田

古来より農業を主体とした地域で、青毛掘川、葛西用水に面し、「地味肥沃にして農業に適す」る地であったといいます（『町勢要覧』原稿 昭和 30 年、久喜町役場）。昭和 40 年代に宅地開発が行われるまで、農業中心の地域でした。明治時代初期の武蔵国の地誌である『武蔵国郡村誌』によると、太田村域で次のような生産が行われていました。

	西村	吉羽村	栗原村	青毛村	野久喜村	古久喜村
米	79.5 石	318.2 石	60.5 石	57.5 石	266.4 石	360.0 石
大麦	334.4 石	1,328.9 石	580.0 石	713.1 石	510.3 石	450.0 石
小麦	43.2 石	173.1 石	60.0 石	125.0 石	100.4 石	76.0 石

		西村	吉羽村	栗原村	青毛村	野久喜村	古久喜村
大豆		56.5 石	226.1 石	215.0 石	217.0 石	—	184.0 石
小豆		—	—	3.0 石	2.5 石	—	—
粟		2.3 石	8.1 石	—	—	9.2 石	—
清酒		185.2 石	92.6 石	—	—	—	—
蕎麦		8.4 石	33.6 石	20.0 石	—	10.0 石	—
木綿	白	320 反	1,252 反	225 反	1,000 反	300 反	750 反
	縞	175 反	700 反	70 反	—	450 反	—
	幕地	—	—	—	—	1,000 反	—

（『久喜市史調査報告書第一集・地誌』（昭和 58 年、久喜市史編さん室） p 220・221）

※石：約 180 リットル

米にくらべて、大麦・大豆の生産が多いことが特徴です。また、久喜市域で明治初期まで盛んに行われた白木綿の生産が太田村域でも活発だったことがわかります。西村、吉羽村では清酒の生産も行われていたようです。

かつての太田地区には湿田が多く、土地は肥沃であるにもかかわらず、収量は多くなかったために、昭和 16 年初頭から昭和 19 年にかけて、農民有志の発起により大規模な暗渠排水工事や湿田の改良が行われました。工事の詳細は明らかではありませんが、千勝神社境内にある「振農碑」に、そのことが記されています。

「（略）今や施行関係一帯の土地は悉く乾濕適度の良田と化し、二毛耕作を容易にし、今後百年の永きに亘り年々歳々、米麥約八百石の増産を約束さるゝに至り、農民の面上初めて喜色あり。倉廩亦能く充たし得可く、故を以て所謂富民の名に相應しき将来を期待し得るに至ったのである。（略）」

※ルビ、句読点は公文書館による

※倉廩…穀物倉庫の意味

振農碑

戦時中に行われ、様々な困難を伴ったであろうこの工事により 65 町 9 反余りの耕地が良田となり、小用排水の拡張改修により、疎水流通する水路の総延長は大小総て 14,380 メートル余りで、これにより用水の調節按排等農民多年の煩いを払拭したと記されています。

この先 100 年、米麦の増産が約束されたと喜んだ先人たちのそ

の努力、その精神は、わずか数十年の後、昭和 40 年代に入って、大きく変わっていくことになります。

太田村は昭和 29 年には町村合併促進法により、久喜町、清久村、江面村と合併し、新生「久喜町」の一区域となります。

■高度経済成長期以降の太田

昭和 33 年に東北線が電化され、列車本数が大幅に増発され、速度も向上しました。久喜町は国鉄（現ＪＲ東日本）と東武鉄道の交わる交通至便の地として、県内外からの移住者が増加しました。昭和 40 年代初めには、久喜駅東側（東口の完成は昭和 45 年 11 月）で、埼玉県住宅供給公社や民間会社による宅地開発（チサン団地、みずほ団地、清光団地）が行われました※。このような状況の中で、良好な住居環境を目指した整備が緊急な課題となり、新しい街づくりに取り組むべく、昭和 40 年代中頃から後半にかけて画整理事業が次々と計画され、施行されました。

区画整理事業名	施行面積（ha）	その他
太田土地区画整理事業	25.8	
平沼土地区画整理事業	67.5	町名は公募により「青葉」と改められました。
栗原土地区画整理事業	38.8	
吉羽土地区画整理事業	83.9	
青毛特定土地区画整理事業	34.6	

（各区画整理事業完工記念誌他により作成）

区画整理事業はいずれも太田地区内で行われ、各事業により整然とした街並みが形成され、人口・世帯数は増加し、太田地区は農業主体の地域から住宅を中心とした地域へと大きく変わっていきました。

※　埼玉県住宅供給公社による住宅、みずほ団地、清光団地は旧久喜町（大字久喜新）地内。

幸手新道 ― 一直線の道 ―

太田地区に古くから暮らしている人々の中には、県道幸手久喜線を「幸手新道」と呼ぶ人がたくさんいます。また、幸手側ではこの道を「久喜新道」と呼んでいますが、「新道」といわれる由縁は、今から 100 年以上前にさかのぼります。

明治 18 年、大宮・宇都宮間に鉄道が開通し、久喜駅が設置されると、物資輸送等のため、久喜駅と各地を結ぶ道路整備が必要となりました。久喜町と幸手町を結ぶ道は、吉羽→栗原→上高野（幸手）、野久喜→青毛→川崎（幸手）の二つがありましたが、明治 16 年の迅速測図（表紙及び次ページ参照）を見て分かるように屈曲していて、また、橋の破損や道の泥濘化もひどかったといいます。

こうした状況の中、両町の有力者たちが協議し、紆余曲折の末、明治 20 年 12 月、県会でこの道路建

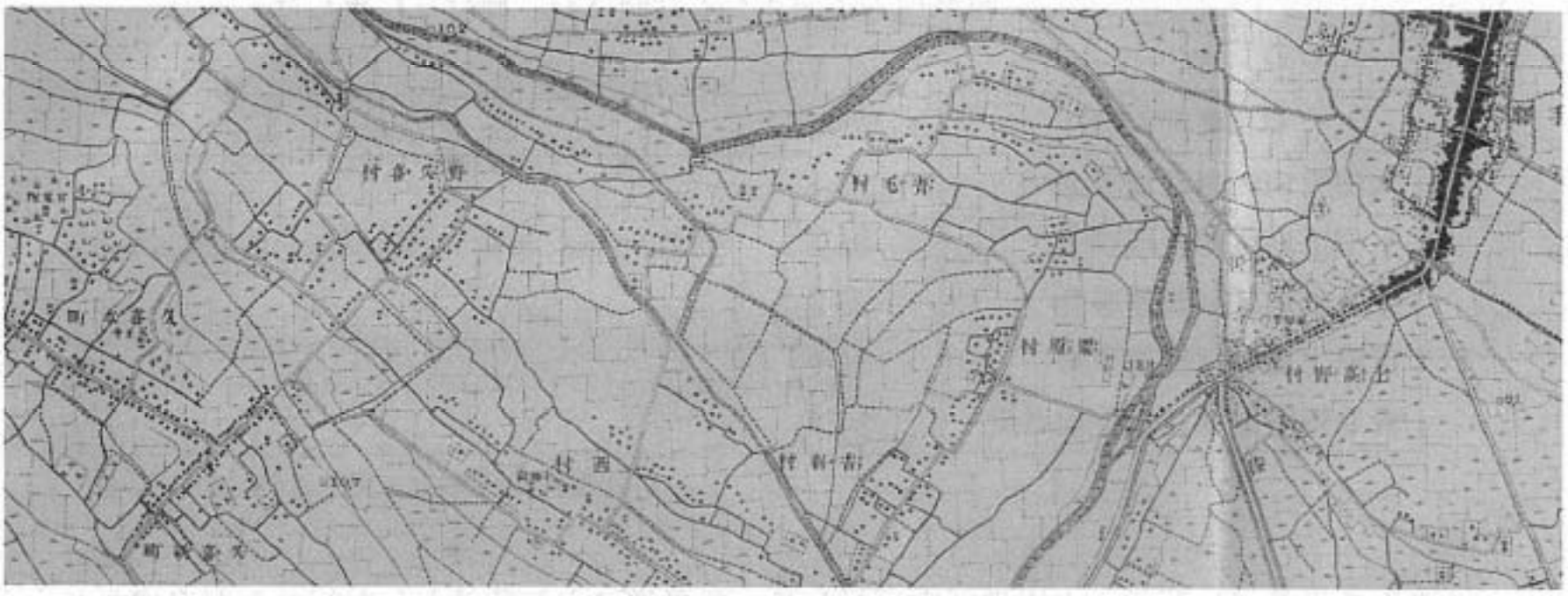
設のための巨額の補助費が可決されると、「両地ノ者之ヲ聞キ欣喜雀躍シ南北二径ノ中間ヲ鑿チテ一線ノ直道ヲ作リ頓ニ多年ノ宿望ヲ達スルコトヲ得タリ」と、その喜びようは相当なものでした。そして、明治 21 年、久喜町と幸手町を結ぶ直線道路として開通すると、沿道では花火を上げ、相撲・撃剣会等が催されるなど、「老少群集シテ之ヲ歓ルモノ数千人実ニ未曾有ノ盛事ナリ」と大変な歓喜につつまれました。

明治 27 年に修正された迅速測図を見ると、新道開削時にはすでに開通していた日本鉄道（現在のＪＲ）の線路を真直ぐ横切り、一直線に作られたこの道の存在は際立っているといえます。

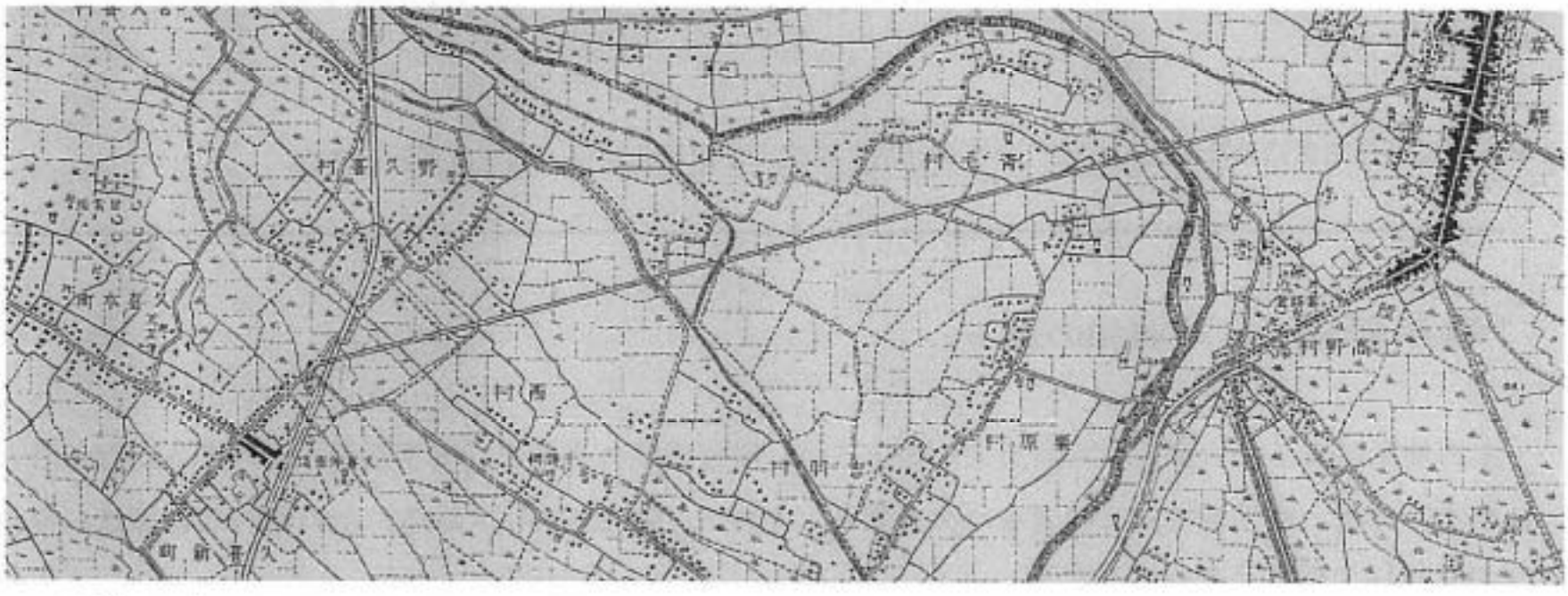
なお、昭和 51 年にはオーバーブリッジが建設され、幸手新道はカーブし、旧道部分は閉鎖されました。

今回の展示においては、県道幸手久喜線を親しみのこもった「幸手新道」という呼び方を用います。

参考：『幸手市史　通史編Ⅱ』P123～126・『幸手市史　近・現代資料編Ⅰ』P850）



明治 16 年（迅速測図「明治 16 年測量同 20 年製版」）



明治 27 年（迅速測図「明治 16 年測量同 20 年製版同 27 年修正再版」）

写真資料

■農村風景

1　西蔵院

西蔵院は甘水山延命寺と号し、新義真言宗の寺で、新四国弘法大師 埼東八十八霊場第三十三番にもなっています。茅葺の本堂（左）と庫裏（右）。梅の花が咲く、早春のひとコマです。昭和37年に本堂改築、同51年に庫裏が新築されました。西蔵院は現在、無住。住職は寿徳寺（鷲宮町上内）が兼務しています。

昭和32年3月

2　女性たちの行進「背負い大師」昭和31年4月

「背負い大師」といってお婆さんたちが、地域ごとに集団で、姉さん被りで大師様を背負って埼東八十八霊場のお寺を巡りました。寺では婦人会などがお茶や赤飯などの接待をし、近隣の真言宗のお寺を巡礼するのに三日ぐらい要しました。いくつかのグループが写真のように次々と通ったといいます。行列のうち何人かが、幟（のぼり）のような旗をかついでいますが、これはなるべく近道を行くために場所に詳しい人が先導していく目印とのこと。

具体的に回ったお寺の名前、参加した人数等は不詳ですが、文献によると、久喜市内の霊場の内、太田地区では多聞院（栗原）、常楽寺（青毛）、高輪寺（吉羽）、西蔵院（野久喜）、遍照院（北）が含まれています。春は「大師参り」、秋は「送り大師」という説もあります。

3　道祖神

このお地蔵さんは、足の病によく効くご利益があるといいます。現在の写真にも幼児用の運動靴が碑の前に置かれています。屋根から吊るされたたくさんの藁草履も、足が良くなるようにお願い事をした人々が、そして、足がよくなった人々が感謝の気持ちを表して残していったものなのでしょう。

昭和32年3月

4　代掻き

昭和30年6月

「耙（マンガ）」と呼ばれる道具を馬に引かせ、代掻き（しろかき）をしています。馬の後ろにいる人が踏んでいる横木の下には、9本から10本の釘のようなものが出ていて、金具の部分が土に食い込んで土を掻き混ぜて土をやわらかくし、苗の根付きをよくしました。

5　田植え

当時としては当たり前の光景ですが、田植えは、終日、水の中で腰をかがめての重労働でした。昭和10年頃までは、大人が総出で田植えをし、小学校は休校となり、学童は子守や雑用の手伝いに従事したといいます。撮影が6月というのは遅すぎる感もありますが、当時は二毛作の麦刈りが済んでから、田植えに取り掛かっていました。

昭和33年6月

6　かき氷屋と少年

太田小学校近くの旧鷲宮道で、自転車でひいた屋台とリヤカーに手回しの氷かき機をのせて行商中のおじさんと、カキ氷を食べる少年。かいた氷の容器は、最中の皮でできていました。氷の上にイチゴ・レモン・メロンのいずれかをかけ、厚い経木（きょうぎ）のさじを付けて、１０円くらいだったそうです。手で振る鐘がチャランチャランと鳴り、「氷」と書かれた旗が風にひらひらとして涼をさそいます。

昭和33年7月

写真左は、現在の吉羽公園。右の田は刈り取りが終わり、ハンデン（収穫した稲架け）が並んでいます。ハンデンの間に、所々お椀を伏せたような塊りが見られますが、これは「もろこし殻」を積みあげたもので、乾かして炊事用などの燃料にしました。

7 兄妹　　昭和33年10月

稲刈りのときは、田植えと違って人手を頼むことはほとんどなかったといいます。刈り取る時期が決まっているので、自分の家の人手でなんとか間に合わせました。昭和50年ごろから稲刈り機が使われるようになりました。

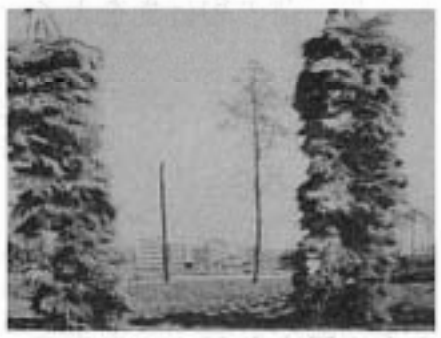
8 刈り入れ　　昭和29年10月

収穫を終えた田んぼに、二毛作（裏作）の麦を撒くため、馬による「地ならし作業」。表面をならすため、スノコ状の板の上に乗るのは、大人では重すぎるので、この子どもくらいの体重がちょうどよいらしい。家によっては馬ではなく、牛を農耕用に使っている家もあった。
昭和30年ごろから耕運機が普及し始め、こうした光景も見られなくなりました。

9 地ならし　　昭和29年10月

農村のひとコマですが、この石仏群は、当時とほぼ同じ場所に建っています。現在の写真とくらべるとただただ驚くばかりです。石仏はそれぞれ、『地蔵菩薩』 享保三年（1718年）建立・『十九夜塔』 元治二年（1864年）建立・『普問品供養塔』 寛政八年（1796年）建立・『光明真言百萬遍供養塔』 文化十二年（1815年）建立。

10 石仏と米俵と少年少女　　昭和41年11月



「木づるし」の向こうに建設中の青葉団地が見えます。秋、木づるしはこの地域の風物詩でした。脱穀を終えた稲藁の束を二つ、（中央に立つ）榛（はん）の木の下から幹を挟むようにしっかりと縛りつけ、上から見て「十」のように互い違いに積み上げていきます。積んだ上に足を載せながら作業を繰り返し、写真ぐらいの高さになったら束を斜めに立てかけるように縛り、雨水除けにします。てっぺんから地上に降りるには、縛った束をしっかりつかみながらゆっくりと一足ずつ、注意しながら降ります。縛りがゆるいと握った束が抜けて、高いところからドサッと落ちて怪我することもありました。
乾いた藁は、冬季の重要な燃料となっていました。

11 木づるしと建設中の青葉団地　昭和49年2月

投網で小魚を取っています。中には甘露煮にして商っている人もいました。５０、６０年前には、夏になると子どものカッパ達が賑やかに泳いでいました。

12 青毛堀　　昭和49年9月

13 空中散布

ヘリコプターでの農薬散布は昭和37年から行われました。現在の吉羽公園東側道路の辺りがヘリコプターの一時的な基地となり、農薬を積み込み、飛び立って、予め決められた田んぼの上空から散布して戻り、また、積み込んでこれを繰り返しました。散布した田んぼの四隅には、赤い布のついた竹竿を立てて危険を知らせました。住宅地が広がるとともに、健康上の問題が危惧され、現在は行われていません。

昭和41年8月

■幸手新道(県道幸手久喜線)

14 幸手新道―冬―　昭和31年1月

向かって右は野久喜、左は吉羽・西。降れば水たまり、照れば土ぼこりと大変な往来だったといいます。

15 幸手新道を行くボンネットバス　昭和36年7月

奥が久喜方面。左側の建物は旧田中経師屋。久喜駅・幸手町間には、大正４年頃には、すでに路線バスの運行が行われており（幸手町の堀中自動車による）、一里十一町（約5.1km）を約12分で走り、運賃は80銭でした（『幸手市史　通史編Ⅱ』321㌻）。
砂利道で、バスが通った後は、すさまじい土ぼこりで、しばらくは眼を開いていられず、息もできないありさまだったといいます。

16 バス時刻表(十字路バス停)　昭和45年9月

この当時、久喜駅前から（この頃まだ東口はありませんでした）、幸手方面へ行くバスは幸手行きのほかに、幸手を経由して五霞・大福田（五霞町）に向かう路線がありました。この当時の停留所は「久喜駅前（西口）」→「十字路」（辻屋前）→（踏切を越えて幸手新道に入って）→「工業高校前」→「農協支所前」と続き、喜橋を渡って幸手方面へ向かいました。

17 旧幸手新道踏切を走り抜けるSL　昭和２９年９月

この踏切は国鉄と東武が別々になっており、それぞれに踏切警手（けいしゅ）用の小屋が建っており、警手が列車運行時間中、常駐していました。写真で、踏切左手に見えているのがその小屋です。手元には上り下りの通過時刻を一枚ずつボール紙に書いて示し、踏切の開閉は手動で行い、来る列車に白旗を差し出していました。この踏切は昭和44年に自動遮断機になり、無人化されました。
警手小屋は、深夜の貨物列車に備えて仮眠できるようになっていて、炊飯のため、米をといでいる姿を撮影者は見かけたことがあるといいます。

18 レンガ工場　昭和40年5月

幸手新道沿いにあったレンガ工場。昭和４０年に火災があり、写真はその直後の様子。焼けて変色してしまったレンガを無償でもらえるという話を撮影者は聞いて、早速リヤカーを借りて出向いた際に撮影した写真。

19 冠水した幸手新道

この年の９月は「台風２１号」と「狩野川台風（台風２２号）」のダブルパンチを受けました。写真は幸手新道踏切から東に（幸手側に）５０ｍほどの所で、土地が低くなっているのが分かります。

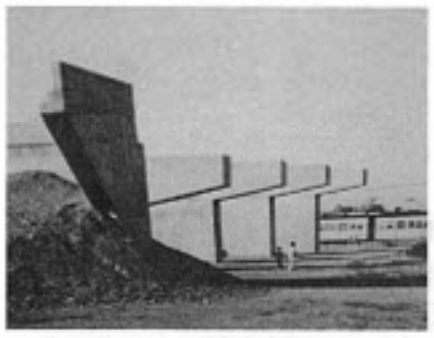
※「狩野川台風（台風２２号）」（１９５８（昭３３）９．２５～２７）の埼玉県内の被害：死者２名、行方不明１名、住家浸水被害床上１万１，５６３棟、床下２万９，９８１棟（熊谷地方気象台ＨＰによる）

昭和33年9月

20 旧幸手新道踏切(東口側)

オーバーブリッジができ、今は閉鎖されている旧県道の踏切を待つ車と人々。写真奥が踏切。当時は、貨物列車が多く、車両の編成替えや国鉄と東武の入替え等に一日数回、長時間の作業で、踏切が２０分から３０分閉まりきりのことがあって、この時代、交通量の少なかった幸手新道も、このように長い列ができることがありました。
昭和44年の5月30日から自動遮断機になりました。

昭和44年10月



21 幸手新道オーバーブリッジ建設中

昭和５１年２月1日開通。今では、市内を東西に結ぶ動脈となっています。開通と同時に旧道が閉鎖されました。工事中の場所で子どもたちが遊ぶという、おおらかな時代でした。橋脚が並んでいる様子は、ちょうど現在工事が進んでいる四間道路（県道春日部久喜線）の状況と似ています。この6年余り後の昭和57年6月にはこの上を東北新幹線が走ることになります。

昭和49年1月

■太田小学校

22 太田小・中学校と「ワシミチ」を行く親子

幸手新道側から、旧太田小・中学校方面に向かって歩く親子。右手奥は千勝神社（三社様）の森。この道は「ワシミチ」（鷲宮道）と呼ばれ、長く幹線道路でありました。
太田中学校は、昭和22年（1947年）4月に開校し、昭和31年（1956年）6月に久喜中学校に統合されました。当初、村議会で中学校四教室を建築することを決定しましたが、中学校独立は生徒数300名以上でなければならないため、小学校増築と名義を変えて県に申請し、昭和25年1月に新校舎落成式を挙行しました。統合後、太田中学校の校舎は、太田小学校が使用継続しました。
田んぼには、ハンデン（収穫した稲架け）がたくさん見えています。

昭和29年10月

23 太田小運動会

木造校舎時代の太田小学校運動会。グランドを走る生徒の足元に注目！なんと皆、裸足です。大正９年に建てられた校舎をはじめとする木造校舎群は、昭和４８年に新校舎が完成すると、すべて取り壊されました。

昭和37年11月

24 太田小学校交通公園

自動車の増加とともに交通事故が増え、事故防止対策の一環として、昭和４６年に太田小学校内に交通公園が設置されました。自転車練習場、歩道、踏切、坂道などが設けられ、交通教育に役立てられました。

昭和46年4月

■千勝神社参道の開発

25　千勝神社祭りの日

青屋祭（おおやまつり）の日、この頃は、子どもが大勢集まり、屋台も出てにぎやかだったといいます。

昭和41年7月

26　千勝神社参道木製鳥居

この当時、千勝神社の参道は遠藤商店の向かい側まで続いていました。そこには大きな石の鳥居、中ほどに写真の木製鳥居があり、社殿は現在の位置より手前にありました。この木製鳥居は赤く塗られていて、「赤い鳥居」と呼ばれていました。明治16年の彩色迅速測図にも、この鳥居が描かれています。参道の両側は鬱蒼（うっそう）とした杉の大樹に覆われ、昼なお暗く、夜間は大人も敬遠していたといいます。

また、参道は直線で１００ｍ以上あったので、当時の太田小学校校庭より長く、他校で行われる競技会に出場する前には、ここで練習をしたそうです。

※太田小学校の敷地は、昭和32年に校地東側に、また、昭和42年～同43年にかけて行われた新校舎建築の際に北側に拡張されました。

昭和28年6月

27　千勝神社参道

石の鳥居と二本の幟立て（のぼりたて）は、現在の境内の入り口に移設されています。参道入口に石段がありますが、自転車は石段の手前で向かって左へ折れて、細い坂道を曲がりながら道路へ下りました。№27の木製鳥居（「赤い鳥居」）は、この頃すでに見当たりません。

昭和41年7月

28　千勝神社脇の道路建設

参道東側の大杉を伐採したところ。境内を北側に拡張し、社殿も北側に移動して、境内入口から社殿まで石畳の参道が設けられました。

昭和45年3月

29　道路となった千勝神社参道

伐採された木々は片付けられ、参道は道路となりました。右端にわずかに写っているのは、移設前の社殿で、分解された木製鳥居の柱などが置かれているのが見えます。

昭和45年3月

30　千勝神社参道の開発

千勝神社脇の道の拡幅工事。この道は元々、昭和２９年に作られた細い道でした。右に移っている千勝神社の社殿は、この写真の右手いっぱいくらいのところに移設されました。左には農協の倉庫が見えています。

昭和45年4月

■久喜駅東口周辺の開発

31 辻(旧道三叉路と女性)

女性が歩いている道が旧久喜道で、左へ分かれる道が久喜駅方面へ行く近道として利用されていましたが、この道は区画整理でなくなってしまいました。この道は明治16年測量の迅速測図にも出ていて、鉄道開通以前からあった古い道であることがわかります。

写真中央三体の石塔は、右から馬頭観音一体、庚申塔二体で、昭和44年から同48年にかけて実施された太田土地区画整理事業の際、同地区内に設けられた「太田児童公園」の一角に移設安置されています。

昭和45年4月

32 東北本線電化工事(久喜駅付近) 昭和32年4月

東北本線の電化運動は第二次世界大戦前から行われていましたが、戦争で一時中断し、戦後、沿線住民をはじめとする関係者の熱心な運動が展開されました。

こうした結果、電化工事は昭和31年8月に大宮～宇都宮間が着工され、同33年4月に竣工しました。長距離列車や貨物列車は未電化区間が多いので、引き続き蒸気機関車やディーゼル機関車も使われていました。

※参考：高崎線は上野～高崎間で昭和26年着工、同27年竣工。

33 東口橋上駅完成

〈久喜駅東口開設までの経緯〉

・昭和38年頃から東口開設について鉄道当局に請願を始める。
・昭和41年3月東西停車場線（幅20m）の認定を取得。
・昭和41年12月東口駅前広場（約5,000㎡）用地取得開始。
・昭和43年春、国鉄（現ＪＲ）が急行列車待避線増線にともない、駅舎移転計画を進める。駅構内に公道跨線橋を架け、東西交通を結ぶ計画を進めていた久喜町は、この駅移転計画を知り、請願書をもって久喜橋上駅新設運動を強力に進める。
・昭和43年5月及び10月に高崎鉄道管理局、東武鉄道、久喜町の三者代表者協議会を経て、久喜橋上駅新設の基本計画がまとまる。
・昭和45年11月20日久喜橋上駅開設。大宮以北では、東北線で最初の橋上駅となる。

昭和45年11月20日

34 東口駅前広場

昭和45年11月20日に久喜駅東口が開設されましたが、開設直後は写真のような状況を呈し、駅前広場の整備が急がれていました。昭和46年6月から工事が始められ、同46年11月末に東口駅前広場が完成しました。

昭和45年11月

35 東口駅前大通り1

昭和45年11月に久喜駅東口が完成。東停車場線（東口駅前大通り）は、当面、チサン団地（東2・3丁目の一部）のために、一部が利用されていました。道路の全幅は現在と同じですが、道路の中心は、広い中央分離帯のようになり、その両側が簡易舗装の車道となっていました。雨が降るとドロドロに、照れば土ぼこりに悩まされたといいます。

昭和49年1月に東停車場線が完成。右側の店は「サイクルショップうちだ」です。

昭和46年1月

36 東口駅前大通り2

（№35の写真の反対側）駅の方向を見る。昭和45年11月に久喜駅東口が開設されましたが、中落堀川に橋がないため、写真の道は、現在、駅から一つ目の信号機のある交差点までで道が切れていました。駅へは、中落堀川の東大橋が完成する昭和47年末頃まで直進できず、迂回を余儀なくされていました。

昭和46年1月

■くらしの風景

37 井戸掘り

上総掘による井戸掘り。この辺りでは「突き井戸」と呼ばれていたようです。上総掘りは、竹や木材を使い、少ない人力で深い井戸が掘削でき、費用的にも安く済んだといいます。写真は、自宅の飲料水用に掘った井戸で、深さ３５間（約６４メートル）も掘ったそうです。

昭和33年4月

38 選挙当日(投票所)

選挙会場のひとつ公民館東支館（現在の太田集会所）。元の太田村役場です。この時代、選挙当日でも、写真のように候補者のポスターが掲示されていました。また、この時行われた町長選の投票率は74.5%でした。（『久喜町だより』第54号　昭和41年8月）

昭和41年7月

39 選挙当日(自転車に乗る親子)

町長選挙の投票所から、投票を終えて帰る人々。№38（の写真）の投票所から通りへ出たところで、写真奥は高輪寺方面、この道の手前は千勝神社。

昭和41年7月

40 水道管敷設工事1

旧鷲宮道沿いの住宅に、「簡易水道」といって専用の井戸を掘り、各戸へ直接配管して水道水を供給する工事。給水を受ける家から主に男手を出し、自分たちでスコップとツルハシで配管敷設溝を掘りました。写真は、その溝へ塩ビパイプを敷設しているところ。この簡易水道は、後に久喜市の本水道に切り替えられました。

昭和34年1月

41 水道管敷設工事2

簡易水道の工事で、敷設する塩ビ配管の接続作業。これは専門家に指導してもらい、敷設後の埋め戻しや、表面の砂利敷きは、溝掘り同様、各家から出た男たちが行いました。
左手奥に見える屋根は高輪寺本堂。

昭和34年1月

猛威を振るったアメリカシロヒトリ駆除の農薬散布。当該地区の人たちが集まって、リヤカーに積んだ動力噴霧器で散布が行われました。

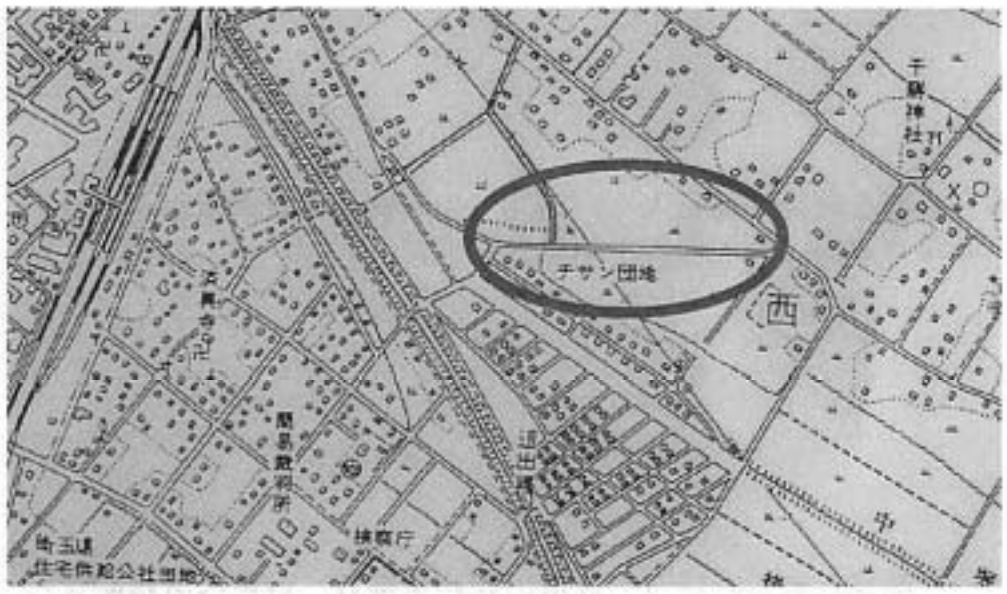
42 農薬散布　　昭和41年7月

43 吉羽(パノラマ)　　昭和44年11月　No.7の写真とほぼ同じ位置からの眺め。
刈入れを終えた稲がハンデンに架けられています。

なくなってしまった道

コラム

昔、千勝神社参道入り口の近くから、久喜駅方面へ向かう道がありました。写真31「辻（旧道三叉路と女性）」に写っている道がそれで、久喜駅へ行く道として便利な道でした。この道は、明治16年の迅速測図にも出ている道で、鉄道開通前からある古い道でしたが、区画整理事業により整備され、なくなってしまいました。



『久喜町全図』（昭和43年4月）
資料No.B6401

『久喜市全図』（平成13年）

地図・航空写真等

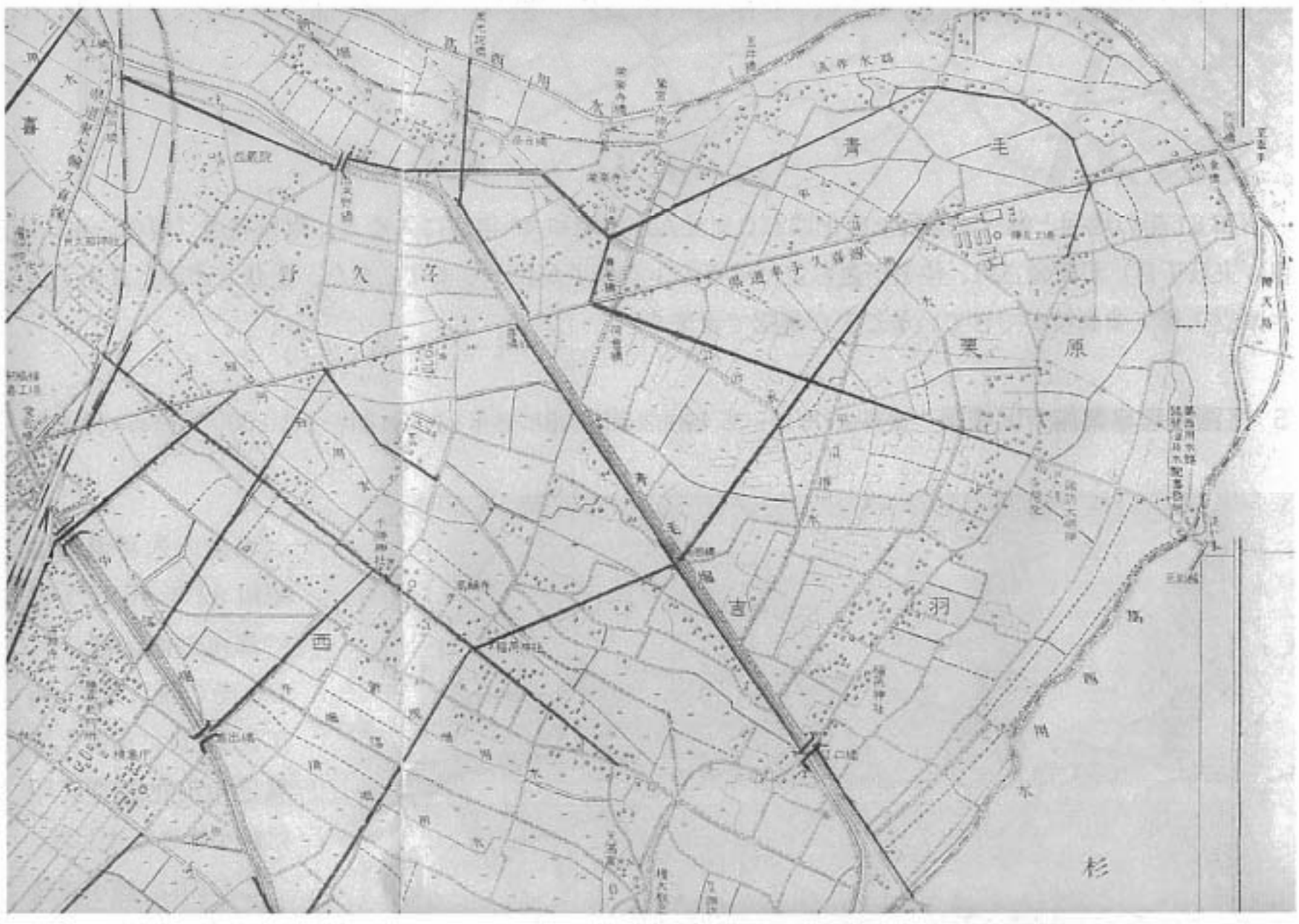
1 迅速測図（『幸手驛』） 明治16年 1/20,000・資料No.B6895・558㎜×440㎜ ※表紙写真

迅速測図とは、正式な基準点（三角点）を用いずに、参謀本部、陸軍測量部が作成した地形図。測地的な位置の精度は低いですが、近世の面影を残す明治初期の地域の様子を知る貴重な資料です。

2 地形図（『幸手』） 昭和23年 1/50,000・長沢隆三氏蔵・455㎜×573㎜

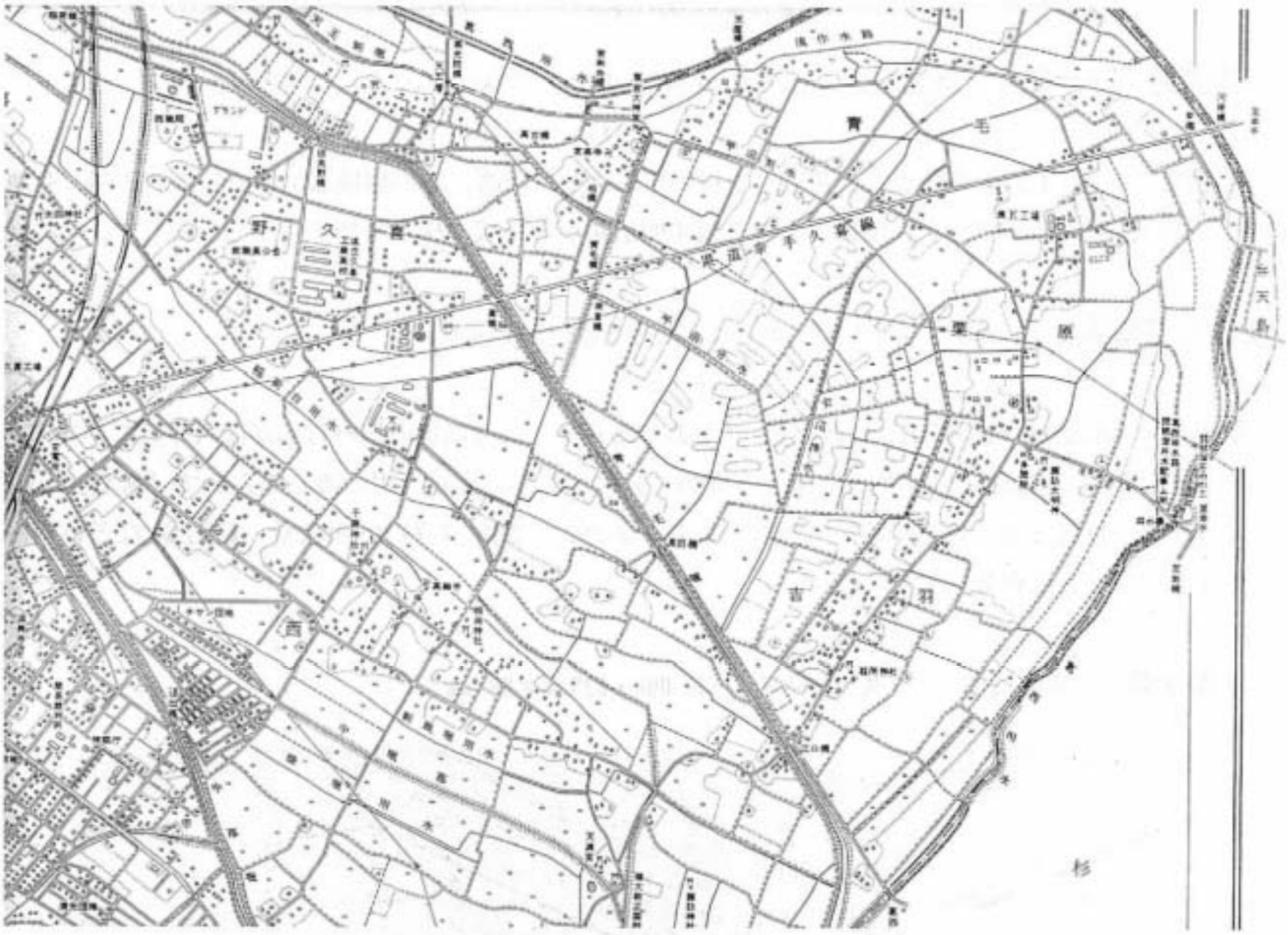
欄外に「昭和23年資料修正（行政區劃）」とありますが、合併以前の旧町村名が記入されています。また、凡例には、「乾田」「水田」「沼田」と細かく分けられていたり、川の渡し場として「人渡」、「人馬渡」など、時代を感じる記号が記されています。また、「佛宇」（寺）、「西教堂」（教会）などいう古風な表現も現在とは異なります。

3 久喜町全図 昭和31年5月・久喜町発行 1/10,000・628㎜×888㎜



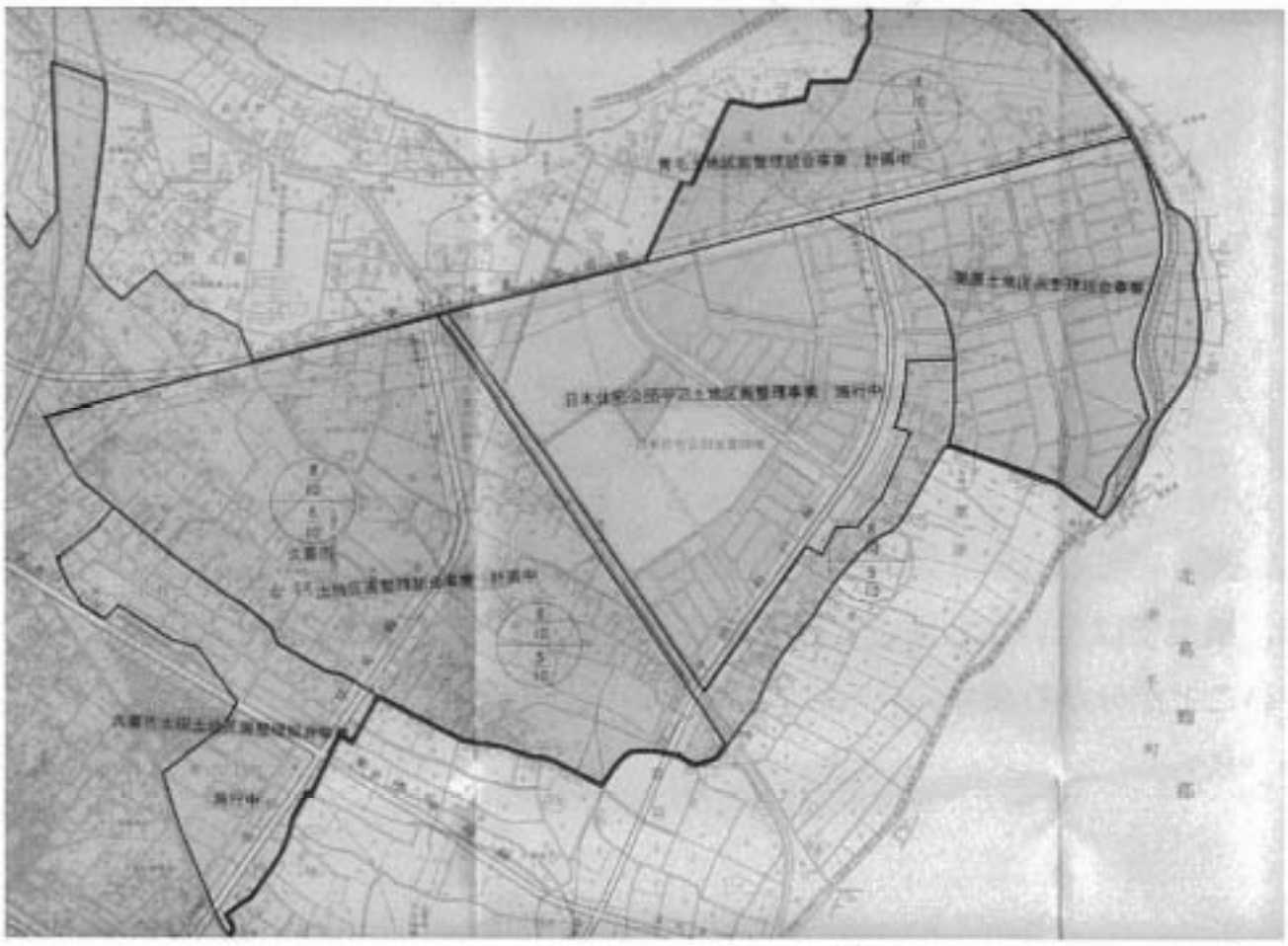
黒い太線は整備予定の道路、橋梁ではないかと推定されますが、正確なことは分かりません。栗原のレンガ工場はかなり規模の大きいことが分かります。

4 久喜町全図　昭和43年4月・久喜町発行　1/10,000・資料No.B640)・667 mm×945 mm



昭和31年の地図と較べて劇的な変化はありませんが、昭和40年代に入ると、東口周辺（現在の東一丁目、東五丁目）が開発され、住宅が建ち並んできている様子がわかります。また、チサン団地（東三丁目）や県立久喜工業高校ができていることが確認できます。

5 区画整理事業施行区域図　資料No.775の一部（都市計画図　昭和48年・久喜市発行・1/10,000・790 mm×1088 mm）



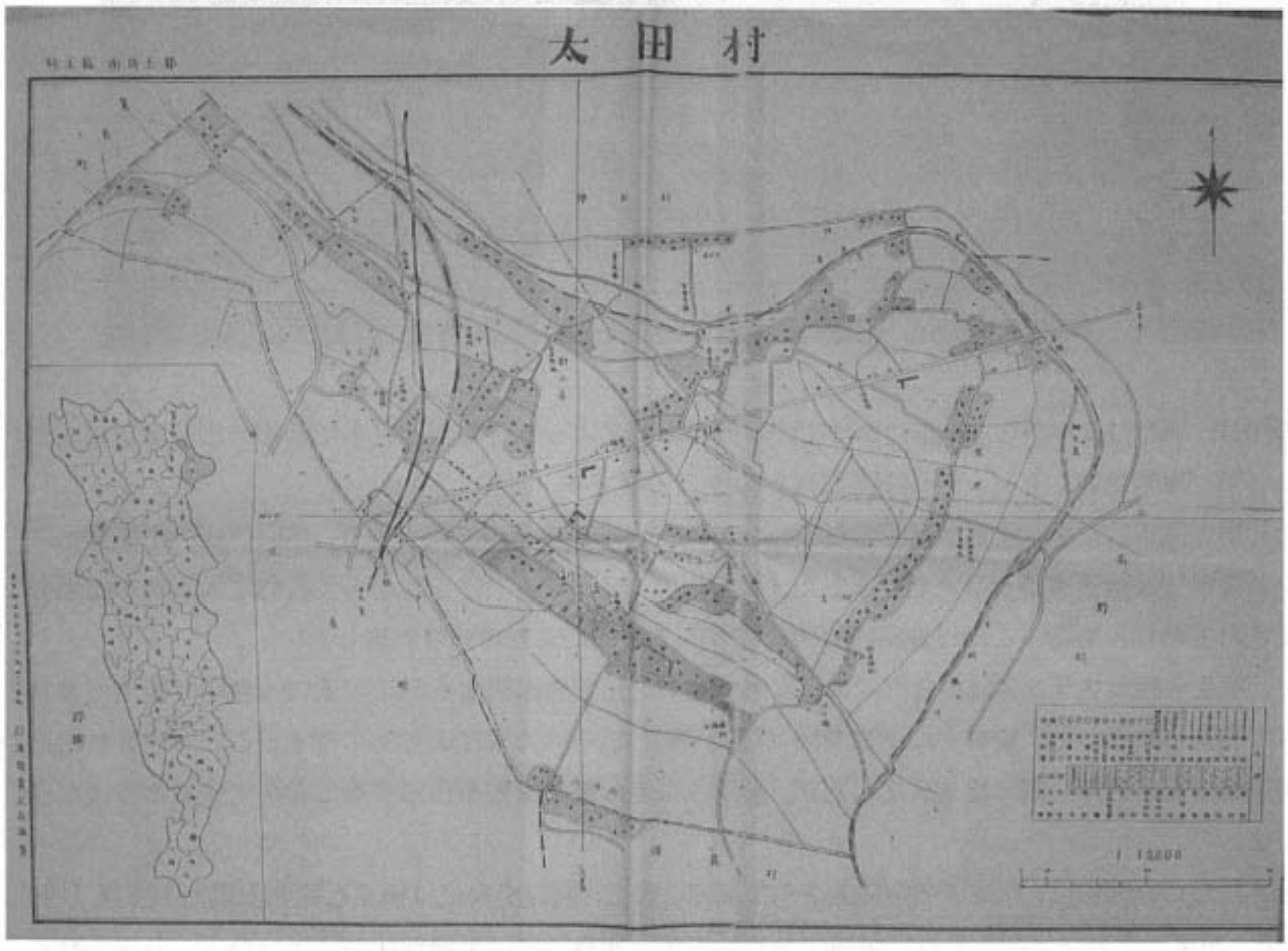
現在の久喜市域は昭和32年10月1日に都市計画区域に入り、その後、昭和45年8月1日に市街化区域と市街化調整区域に線引きされました。

この図は、線引き後の都市計画図を使って、五つの区画整理事業の区域が示されています。

10 **航空写真**　昭和 43 年　長沢隆三氏所蔵

中央右よりの一団の住宅（チサン団地）が浮島のようになっています。

12 **太田村（コピー）**　作成年不詳 1/10,000 久喜市教育委員会所蔵　417 ㎜×510 ㎜



昭和 29 年 7 月の町村合併以前の太田村地図。太田村作成によるものと推定されますが正確なことは分かりません。枠外左に地図を作成した会社の住所が記入されており、この会社の住所が「東京都文京区八千代町」となっていることから、昭和 22 年以降に作成されたものと推定され、太田村の末期の様子とみられます。バス停留所が記入されていたり、水田も「乾田」「水田」「沼田」と分類が細かいのも特徴です。この頃、村内に「火の見」（火の見やぐら）が 5 ヶ所あったことがわかります。

13 明治前期測量 2 万分 1 フランス式彩色地図

『埼玉縣武蔵國南埼玉郡吉羽村及北葛飾郡外野村』（復刻版）

明治 16 年・1/20,000・426 ㎜×335 ㎜

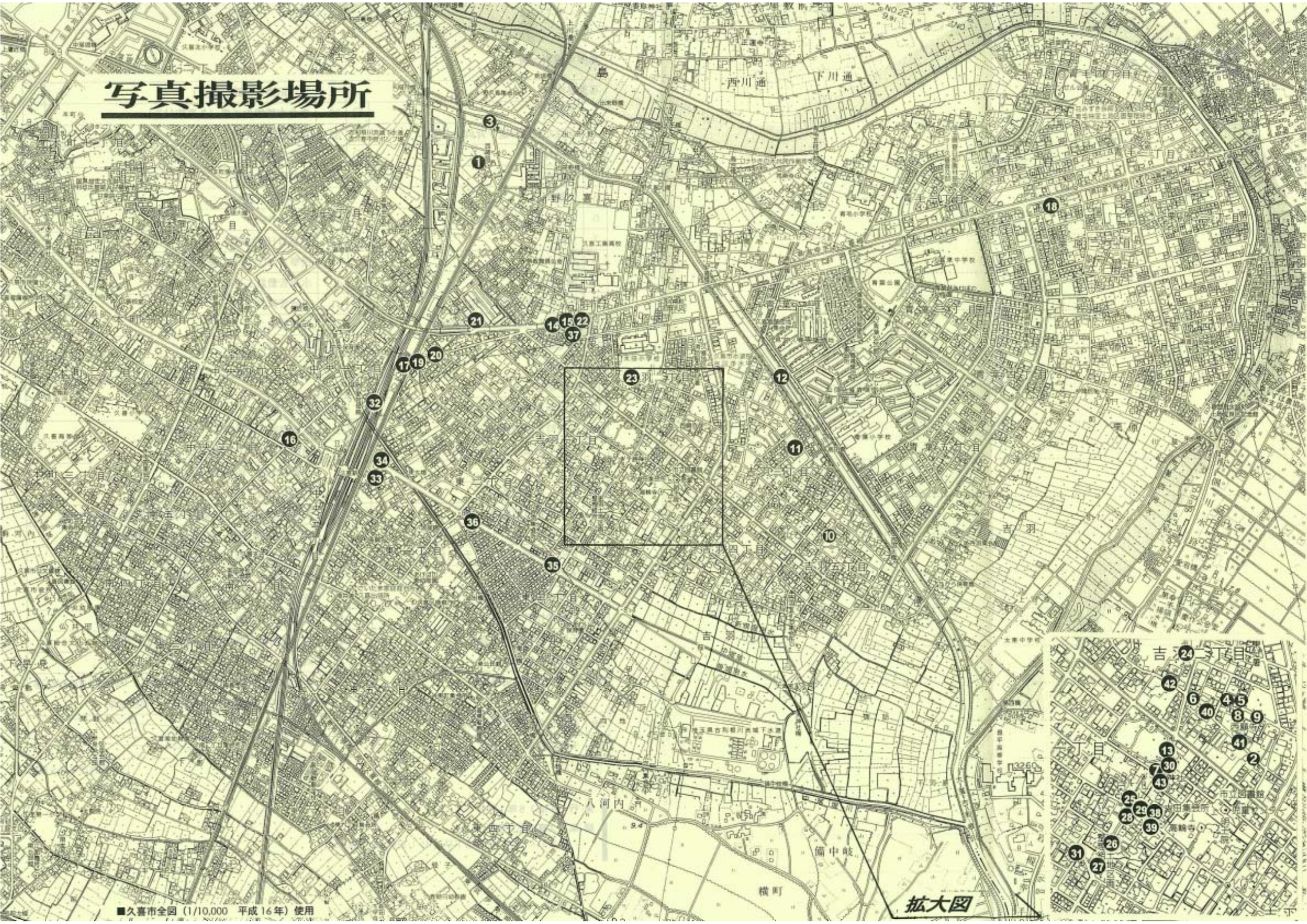
この図は、明治 13 年から 19 年にかけて陸軍参謀本部によって行われた日本で最初の広域測量の成果である「第一軍管地方二万分一迅速測圖原圖」の中の一枚です。

明治初期の陸軍は、幕府陸軍が模範としていたフランス軍政をそのまま引継ぎ、地図作成の中枢部にはフランス陸軍で技術を習得した人がいました。芸術の国、フランスでは当時から美術的に大変優れた地図が作成されており、当初、この迅速測図原図はフランス方式により作成されました。

後に、軍政全般がフランス式からドイツ式に移行され、迅速測図原図もドイツ式の一色刷り図用に書き直されて刊行されました。資料 1 の迅速測図（『幸手驛』）はその方式によるものです。この彩色された迅速測図原図は長く倉庫に眠ったままでしたが、復刻されその優美な姿を目にすることができるようになったのです。

彩色されたこの図には、作成者名が記入されており、また、図の中央には磁北と真北と思われる図（「明治 16 年　四度十七分」と記入あり）が描かれています。欄外には、千勝神社の「赤い鳥居」も描かれています。（参考：「明治前期測量 2 万分 1 フランス式彩色地図」解説　（財）日本地図センター）

写真撮影場所



■久喜市全図（1/10,000　平成16年）使用

メ　モ

■展示資料一覧

写真資料					
1	西蔵院	○	31	辻（旧道三叉路と女性）	
2	女性たちの行進「背負い大師」		32	東北本線電化工事（久喜駅付近）	
3	道祖神	○	33	東口橋上駅完成	
4	代掻き		34	東口駅前広場	○
5	田植え		35	東口駅前大通り１	○
6	かき氷屋と少年		36	東口駅前大通り２	○
7	兄妹	○	37	井戸掘り	
8	刈り入れ		38	選挙当日(投票所)	
9	地ならし		39	選挙当日(自転車に乗る親子)	
10	石仏と米俵と少年少女	○	40	水道管敷設工事１	
11	木づるしと建設中の青葉団地		41	水道管敷設工事２	
12	青毛堀		42	農薬散布２	
13	空中散布		43	吉羽（パノラマ）	
14	幸手新道―冬―	○			
15	幸手新道を行くボンネットバス		地図・航空写真等		
16	バス時刻表(十字路バス停)		1	迅速測図『幸手驛』　明治 16 年	
17	旧幸手新道踏切を走り抜けるＳＬ		2	地形図『幸手』　昭和 23 年	
18	レンガ工場		3	久喜町全図　昭和 31 年 5 月	
19	冠水した幸手新道		4	久喜町全図　昭和 43 年 4 月	
20	旧幸手新道踏切(東口側)	○	5	区画整理事業施行区域図（都市計画図）昭和 48 年	
21	幸手新道オーバーブリッジ建設中		6	太田土地区画整理組合「市街化予想図」　昭和 44 年 9 月	
22	太田小・中学校と「ワシミチ」を行く親子	○	7	航空写真　昭和 23 年 4 月 2 日	
23	太田小運動会		8	航空写真（パネル）　昭和 47 年	
24	太田小学校交通公園		9	航空写真（パネル）　昭和 55 年 10 月	
25	千勝神社祭りの日		10	航空写真　昭和 43 年	
26	千勝神社参道木製鳥居		11	埼玉郡南埼玉郡太田村全圖　作成年不詳	
27	千勝神社参道	○	12	太田村　作成年不詳	
28	千勝神社脇の道路建設	○	13	明治前期測量 2 万分 1 フランス式彩色地図　『埼玉縣武蔵國南埼玉郡吉羽村及北葛飾郡外野村』(復刻版)　明治 16 年	
29	道路となった千勝神社参道	○			
30	千勝神社参道の開発	○			

○：現在の写真を展示

発 行：平成１８年１０月
編 集：久喜市公文書館
〒346-8501　久喜市下早見 85-1/TEL0480-23-5010